

新刊紹介

酒井順一郎著『日本語を学ぶ中国八路軍 我が軍ハ日本下
士兵ヲ殺害セズ』 ひつじ書房 (2020)、166頁

赤 桐 敦

言語教育政策の歴史的研究には、複眼的な視座を欠くことができない。言語教育政策は、しばしば、言語イデオロギー (language ideology)、言語集団に対するステレオタイプ (stereotype) や社会的表象 (social representation) と呼ばれる、政策決定者の一方的な思い込みに基づき、策定され、実施される¹⁾。しかし、歴史的研究において、現代に生きる研究者が、単に過去の政策を俯瞰し、この思い込みを処断したとしても、得られるものは少ないだろう。政策が導入された社会文脈を、同時代の当事者の視点から、複眼的にとらえることによってのみ、史実を的確に捉え、過去の政策を検証することが可能となる。しかし、これは当事者ではない研究者にとって、多大な困難を伴う作業となる。

本書は、このような歴史的研究のジレンマを乗り越えようとする、意欲的な研究である。本書は、日中戦争期 (1937-1945) を中心に、中国八路軍 (1937-1947) が実施した日本語教育を研究対象とする。これまでの戦時下の日本語教育を対象とする研究では、否定か、肯定かとの現代の研究者の立場からの一方的な検証がしばしば行われてきた。しかし、本書は、中国での日本語普及を構想する日本人、日本語を学ぶことで実利を得ようとする民間の中国人、そして、日本語を武器として日本軍と戦う中国八路軍と、多角的に検討することで、当時の日本語教育が実施された社会文脈を描き出すことに成功している。

本書の著者は、これまで、東アジアにおける日本語教育とはいかなるものがあったのか、との主題のもと、清朝末期から現代に到るまでの中国人日本留学政策を研究してきた。

『清国人日本留學生の言語文化接触 - 相互誤解の日中教育文化交流 - 』(2010) では、清国人として日本へ留学した中国人学生が、日本社会に対する希望と失望の間を揺れつつ、日本語を通じて、近代国家とはなにかを体験する様子が、史料を駆使して描き出された。また、『改革開放の申し子 - そこに日本式教育があった - 』(2012) では、文化大革命 (1966-1976) により高等教育が荒廃した中国において、日本留学を通じて、科学技術を学ぼうとする若者の情熱が、当事者へのインタビューと史料により、忠実に記録さ

れた。著者は、これまでの研究を通じ、近現代の中国人日本留学生が、ただの「日本語学習者」ではなく、高い知性を持つ1人の観察者として、先進国日本の明部と暗部とを分析し、帰国後に中国社会を躍進させる原動力となったことを、究明してきた。

著者は、『抗戦日語読本』（八路軍政治部編、出版年不明）という日本語教材を、偶然に入手したことから、本研究に着手した。本書は、6章から構成され、教材の背景が徐々に明らかにされる。まず第一章では日本人から見た日本語教育、次に第二章では民間の中国人にとっての日本語教育、そして第三章から第六章までは八路軍における日本語教育が研究対象とされ、当時の日本語教育を取り巻く複雑な社会状況が、複眼的に考察された。

第一章「大東亜共栄圏における日本語」では、まず、保科孝一（1872-1955）や松岡洋右（1880 - 1946）の言説から、日本人が構想した、「大東亜共栄圏」の地理的な領域と、日本語が域内の通用語として位置づけられたことが確認された。次に、外国語としての日本語の価値を、当時の日本人がいかに認識し、国際社会において高めようとしたのかが探索された。そして、国語対策協議会（文部科学省）をはじめとする、さまざまな機関が「大東亜共栄圏」において、日本語をいかに普及させようとしたのかが検討された。

第二章「中国にとっての日本語」では、1930年代の中国における日本語ブームが、上海を中心に考察された。満州事変（1931）、第一次上海事変（1932）と、日本による中国侵略の意図が露骨になると、中国側の知識人や学生の間で危機感が高まり、抗日運動が各地で激化した。これに対し、上海では、日本語学習熱が高まり、戦中でも日本語学習者が増加していたことが提示された。民間の中国人には、敵性語として忌避すべき日本語を、積極的に学ぼうと考える人々がいたのである。ただし、これは日本側が夢想した新秩序建設に、中国人が賛同したことを意味しない。国際都市上海で、力を増した日本人勢力の言語を学ぶことで、なにかしらの利益を得ようとする、実利的動機に基づく日本語ブームであった。

第三章「八路軍の日本語重視戦略」では、研究対象を八路軍に移し、抗日戦略において、日本語教育が重視された経緯を明らかにした。当初、八路軍は、国民政府軍との戦闘の経験から、軍事的に勝利すれば、日本人兵士は容易に投降し、捕虜になりうると考えていた。しかし、日本人兵士の多くは、生きて捕虜になることを強く拒んだ。このため、前線では、日本人兵士に対し、日本語を用いて投降を説得する必要が生じた。さらに、毛沢東は、日本人兵士と軍部の戦争指導者とを区別し、人民としての日本人兵士もまた、軍国主義の被害者であり、抗日統一戦線へ参加が可能であると考え、日本語によ

るプロパガンダ工作を行うことを計画した。

第四章「八路軍敵軍工作訓練隊」では、毛沢東の計画を受け、八路軍がいかに日本語教育を組織したのかが論じられた。まず、「敵軍工作訓練隊」（以下、訓練隊）が1938年に延安において設立された経緯が紹介され、次に、日本軍に対する工作の中心となった、王学文（1895-1985）、趙安博（1915-1999）らの日本留学組の役割が解説された。そして、訓練隊の学生には、八路軍の中でも教育水準の高い者が選抜され、教員には、日本語能力が高い中国人教師と、日本人捕虜が選ばれていたことが示された。当時の八路軍の中国人兵士には、中国語でも読み書きができない者が多かったが、訓練隊には優秀な兵士が選ばれた。このことは、毛沢東の日本語教育に対する期待を表していた。

第五章「訓練隊の日本語教育の実態」では、訓練隊の日本語教育が、いかに実施されたのかが解明された。訓練隊では、1938年12月から、第1期生120名から150名程度の学生に対する日本語教育が実施された。その内容は、仮名の発音から始まり、実戦での日本人兵士との対話に耐えうる、高度な日本語まで学べるよう設計されていた。毛沢東は、共産党の政治思想を伝える日本語レベルを欲したが、第1期生修了生のうち、捕虜の教育ができる者が20.7%、尋問ができる者が38%であった。この成果は、訓練隊の置かれていた厳しい教育環境を考慮すると、比較的高いものであったと評価される。

第六章「前線部隊での日本語教育と戦場の日中文化交流」では、訓練隊以外の、前線の各師団などで行われた日本語教育が検討された。中国人兵士に対する日本語教育では、親しみやすい歌やスローガンなどの短文が教えられた。これらの歌やスローガンは、日本人兵士が投降しやすいように、『草津節』などの民謡の替え歌や、家族や故郷を連想させる内容であった。この日本語による工作により、日本人兵士の捕虜数がある程度増えたと推測される。その増加数を正確に検証することは困難であるが、日本軍は、八路軍の日本語による呼びかけに危機感を抱くまでになっていた。また、捕虜になった日本人兵士が、中国人兵士とともに、日本語の歌を歌い、親交を深めることもあった。

本書を通じて、日本語が日本軍に対する諜報活動に対して使用されただけでなく、多数の日本人兵士を救うために用いられた、との意外な史実が明らかになった。「生きて虜囚の辱を受けず」との教育により、自決を当然と考えていた日本人兵士にとって、親しみのある日本語による呼びかけは、強く心を動かされるものであった。

また、八路軍が、末端の中国人兵士にまで日本語を学ばせたことは、日本人兵士を人間として扱わせることとなった。日本人兵士も中国人兵士も、共に人民として扱い、糾合することは、毛沢東の政治戦略の一環ではあった。だが、この方針により、互いの言語文化を学ぶことが、戦場で行われるようになった²⁾。敵国の兵士の言語を学ぶことは、

敵兵が1人の人間であることを確認させ、戦後も続く日中民間交流の端緒となった。

本書が示した、日中戦争期における中国人の日本語教育に対する態度は、敵国語か否かとの二項対立ではなく、複雑な色彩を持つものであり、そこから生じた言語教育政策も、日本人が予期しえないものであった。このように、言語教育政策の歴史的研究には、まだ、未知の領域が広がっている。

注

- 1) 言語教育政策とステレオタイプの関係については Beacco・Byram (2007: 26) を参照。
- 2) 趙安博の回顧によれば、訓練隊の中国人学生は、日本人捕虜から日本語を学ぶとともに、中国語も教えていた (水谷 2006: 86)。

文献

水谷尚子 (2006) 『「反日」以前: 中国対日工作者たちの回想』 文藝春秋

Beacco, Jean-Claude / Byram, Michael. (2007), *From linguistic diversity to plurilingual education: Guide for the development of language education policies in Europe*. Council of Europe

(京都大学大学院工学研究科附属工学基盤教育研究センター)